

引揚船の船員の一人に宇和島の人が出て、私と同じ愛媛の者とわかると、内地は何もないからと、米一斗砂糖を飯盒二杯を恵んでくれた。ありがたかった。

長崎県―別府へ出た。便船待ちで数日旅館で休養し、温泉へも入って戦塵を心ゆくまで洗い落とすという幸運にも恵まれた。

別府―八幡浜―西条と船と列車を乗り継いで五年ぶりに故郷の町へ降り立った。万感を胸に。無事で元気に帰れた嬉しさいっぱいの心の隅に、戦死や傷病で戦列から離脱して行った人の、特に立派な中隊長手塚大尉の遺体など思い浮かべては、相済まぬとの気持ちと御冥福を祈る心、切でありました。国鉄の駅より徒歩で約三キロ余り。懐かしい家族に迎えられての復員完結。

家族全員揃って喜んでくれ。氏神様へお礼詣りをしました。数え年二十六歳でした。

昭和二十二年結婚。夫婦とも元氣。子供は男二人。孫は三人。現在は農業は子供がしてくれるので、私は管理だけ。

三百年近い歴史をもつ旧家に長男として生まれた私。ただ今は、保国寺檀家総代を引き受け、檀徒の和の中心となり、寺の護持、行事の世話にと尽くしています。広大な支那大陸を北へ南へと数千キロ、歩き巡ったこと。よくもまあ歩いたものよ！との感無量である。

合掌。

満支国境と中支転戦

三年間の初年兵

長崎県 本田 角 麻

私は、大正十一年四月二十六日生まれ、長崎県北高来郡古賀村木場名二二二五で、育ちました。生家は農家でしたが、長崎市へ出て商店に勤務していました。

昭和十七年の兵隊検査で甲種合格。同十八年一月十日、愛媛県松山市の西部六二部隊へ入営しました。満州第一独立守備隊第四大隊から教官と助手が来ていて、松山で三カ月間一般歩兵の教育を受けましたが、私た

ちは九九式歩兵銃での教育でした。

三月十五日、松山を出発、三月十六日下関出航、釜山上陸、同日付けで独立守備隊第四大隊に転属、三月十八日鮮満国境通過、満州通化省通化の第四大隊（満州第三五六部隊）へ入り、六月まで教育を受け、内地と併せ二回目の検閲を受けました。満州では三八式歩兵銃を使っていましたので、内地を出るとき持ってきた九九式歩兵銃の弾丸は、九二式、重機関銃の弾と同じですから口径が大きい。そのため、その銃を内地へ戻し、我々は三八式歩兵銃を使うことになりました。

独立守備第四大隊は、南満州鉄道の守備をしていましたが、熱河省青龍県で共産八路軍を警備するため七月五日通化出発。十日付けで一等兵に進級しました。勤務は万里の長城の望楼の中において、そこを出たり入ったりしているのです。部落の長から「八路軍が来た」と通報され、出動すると逃げてしまう。

長城は石を積んであるのみであり、第四大隊四個中隊のうち一個中隊だけで、ズーッと勤務し、憲兵が通訳を兼ね配属され行動していました。私たちも一度八

路軍と撃ち合いをしたことがあります。八路軍はこちらが弱ければ攻め、強ければ逃げる、治安を攪乱していました。

昭和十八年十月、三号作戦演習動員があり、奉天で一週間、その後また熱河省方面へ出動。昭和十九年一月二十四日、原駐地帰還のため冀東地区を出発し、一月二十五日通化へ帰りました。

二月二十四日、第十一野戦補充隊に転属のため通化出発。奉天着、三月十九日、奉天出発、貨車で江蘇省鎮江着、野戦補充隊（震雷三三〇〇部隊）。二十二年二月二十五日、独立歩兵第六二九大隊に編入。このように私は満州から中支へと転属勤務したのでした。

満州での教育中、夏は暑かったが乾燥していて咽喉が渇くが生水は飲むことを禁止されているので、顔を洗う格好をして水を飲みました。冬は飯がカチカチに凍る。雪は氷の粒になって降ってくる。

私は大隊砲の教育を受けただけで、前・後盒に一二〇発の実弾を常に持って、北支、満州の間で警備していました。

教育も厳しかった。古参兵の二年兵が鹿兒島、三年兵が徳島県であり、古参兵は白米を食べ、支那酒（チャン酒・焼酎）を飲んでいました。新兵は麦飯。見習士官の教育は雪中でやらされた。私たちの後から初年兵が来ないので、いつまで経っても初年兵、ついに補充がこないから復員するまで初年兵でした。

国境では八路军が相手です。先にも申したように、こちらが弱いと見ると攻めるので、油断はできない。攻めると逃げるので、我が隊では戦死者は出ませんでした。

中支への転属は、奉天蘇家屯から中支の浦口（南京対岸、揚子江北岸）までの列車は津浦線、揚子江は船で渡り、南京から鎮江まで列車です。空襲は受けなかったが、大陸から内地へ空襲する飛行機は見ました。

転属した第四補充隊は独立混成第九〇旅団に編成替えし、共産新四軍との戦闘や警備が主任務でした。上海被服廠へ綿糸を輸送する船の警備をするためクリークの土手を警備して歩く。江蘇省豊利鎮に駐屯、一個中隊ずつ分散配備されていたが、新四軍との戦闘はあ

りませんでした。

今度は、米軍が逆上陸するというので、蛸壺掘りを豊利鎮でしました。農耕地区であったので食糧はありました。しかし、新四軍との戦闘で全滅した警備隊もありました。

終戦後は蒋介石軍と共同で、昭和二十一年一月十五日まで新四軍に対して防備をしていました。そのため武装解除はされずに兵器を持っていました。治安は悪くなってきました。一月十五日、武装解除宿舍の民家に兵器弾薬を置いて丸腰になった（川の土手に兵器を並べて）。そのため警備を蒋介石軍と交代することになりました。我々の部隊は貨物船で揚子江を下り、上海の呉淞に上陸し、食糧は蒋介石軍から支給されました。

呉淞の第三兵舎で帰還の命令を待っていたとき、ジフテリアが流行して出航が遅れ、今度は元通信隊の駐屯跡に集められて、毎日、被服や食料の検査を受ける練習をしていました。帰還が決まり、市政府の庁舎跡にアンペラを敷いて一晩寝て中国軍の検査をうけまし

た。時計や万年筆は取られたが他の物は取られません
でした。中隊も皆一緒でした。幸いに体の調子は部隊
員も悪い人はなく、全員帰国できることとなりました。

昭和二十一年二月二十四日、上海飯田棧橋からLS
Tで、揚子江河口で一晩停泊して出航、二十八日佐世
保に上陸、復員しました。DDTをかけられ、海兵団
の跡地へ集まり、故郷が遠い所の者から汽車に乗って
帰り、長崎の者は最後でした。持参して来た米は中国
の蘇州米（日本米と同じ軟質米）で、この米を持参し
て帰宅しました。

切符をもらいましたが長崎は私一人でした。部隊は
全国の寄せ集めでした。補充兵や召集兵が多く、現役
の私が一番若かったのです。帰宅すると家族は皆元氣
でした。兄弟三人、長兄は海軍の補充兵で揚子江河口
付近の舟山列島にいて、私より後に帰ってきましたが、
次兄は三菱造船にいて内地だったので無事で、父母も
元氣でした。

私は三年間初年兵で勤務し、満州と中支にいました
が幸い生還できました。満州から南方へ転属して玉碎

した人もおり、終戦後、シベリアへ抑留された人もお
りました。戦友は他県の者ばかりで、一緒に入営した
者とはたまには会えますが、戦友会はなく寂しい限り
です。苦勞の三年間でしたが生還でき、兄弟三人共生
きていたことは父母にとっても幸いであつたと思いま
す。

歩兵第八十五連隊

湘桂・明号作戦参加

福島県 七海 寅松

昭和十七年徴集兵の私は福島県郡山市で農家の三男
として大正十一年一月二十日に生まれ、昭和十七年十
二月二十日現役兵として、歩兵第二十九連隊の留守隊
に入営しました。

中支の第二十二師団歩兵第八十五連隊へ転属を命ぜ
られ、翌昭和十八年一月九日、下関を出航し、現地で
三カ月間歩兵としての訓練を受けました。一期の検閲